北海道東部，厚岸町床潭沼コアに認められた 1843 年大津波と先史巨大津波の痕跡

Tsunami traces of the 1843 tsunami and pre-historical large tsunamis in the lacustrine cores at Tokotan-numa, eastern Hokkaido

重野 聖之 [1]; 七山 太 [2]; 添田 雄二 [3]; 古川 竜太 [4]; 熊崎 農夫博 [5]; 中川 充 [6]; 堤 康夫 [7]; 桂川 実 [7]
Kiyoyuki Shigeno[1]; Futoshi Nanayama[2]; Yuji Soeda[3]; Ryuta Furukawa[4]; Nobuhiro Kumasaki[5]; Mitsuru Nakagawa[6]; Yasuo Tsutsumi[7]; Minoru Katsuragawa[7]

[1] 明治コンサルタント株式会社・北海道支社; [2] 産総研・地質; [3] 道開拓記念館; [4] 産総研; [5] 厚岸町海事記念館; [6] 産総研・地調・北海道; [7] 海事記念館
[1] Meiji C; [2] GSJ/AIST; [3] Historical Museum of Hokkaido; [4] AIST; [5] Akkeshi Marin Memorial Senter; [6] Hokkaido Branch, GSJ, AIST; [7] none

http://www.meicon.co.jp/

北海道東部太平洋沿岸域は，地震津波の常襲地帯である．近年，この地域（十勝～根室沿岸）では，過去の津波が陸上に残したと考えられる津波堆積物に関する研究が行われている．このうち厚岸地域における既存研究例としては，七山ほか（2001：活断層古地震研究報告 1），Sawai（2002；JAES20），添田ほか（2004；地質学論集 58）があげられる．七山ほか（2001）は，海跡湖である床潭沼の湖底堆積物を採取して詳細に解析し，少なくともここに 3 層の津波堆積物が存在することを報告した．このうち，17 世紀と 13 世紀に発生したとされる巨大津波の痕跡は，Ta-a（1739 年樽前山）火山灰層，Ko-c2（1694 年の駒ヶ岳）火山灰層，Ta-b（1667 年の樽前山）火山灰層，約 10 世紀の B-Tm（白頭山-苫小牧）火山灰層を鍵層として，史跡国泰寺跡周辺でも同様に確認され，さらに，道東部太平洋沿岸域でもひろく対比されているイベントであることが添田ほか（2004）によって明確にされている．一方，Sawai（2002）は Ko-c2 直下と Ta-b 直下にそれぞれ津波堆積物が存在するとし，17 世紀には厚岸地域で 2 回の巨大津波が発生したと報告した．しかし，17 世紀に 2 回の巨大津波が発生した痕跡は，道東部太平洋沿岸域の他のどの地域でも見つかっておらず，混乱をもたらしていた．平成 18 年 2 月，我々の研究グループは氷結した床潭沼においてボーリングを行い，総計 7 本のコアを採取した．それを詳細に解析した結果，17 世紀と 13 世紀の津波痕跡の下位にも少なくとも 2 層のイベント堆積物の存在を認識することができた．これらは浸食基底を伴う層厚 0.5-30 cm の砂礫層を有機質泥が被っており，湖沼に流入したタイプの津波堆積物の層相に酷似する．さらに，これらのイベント層序は添田ほか（2004）と整合的であり，床潭沼地域は他の道東地域と同様に，400-500 年毎に巨大津波の来襲を受けていたと考えるのが，現状では妥当であろう．一方，今回，Ko-c1（1856 年）と Ta-a（1739 年）火山灰層との間にも，新たにイベント堆積物が発見された．これは国泰寺の寺務日誌「日鑑記」に記載された道東最古の地震津波記載である 1843 年天保大津波の痕跡を示していると考えてよいであろう．しかし，1952 年 3 月 4 日に床潭で大きな被害をもたらした十勝沖地震津波の痕跡は今回の調査では認識できなかった．床潭の住民の証言に基づけば，被災時の床潭沼は人が歩いて逃げることができる氷結した状態であり，津波は氷上を滑るようにゆっくり遡上したために，この際，湖沼底の撹拌が激しく起こらなかったものと考えられる．